近寄らないようにってケッキョグがわり遊んだりしたけども。落ぢればまいねってな。すごがったんだね掘ったあどって。あのオラだぢ子どもだぢのどぎだばソゴナシヌマだのって名前で呼んだりしたばってさ。ソゴナシヌマだってな。ふけくてな。ボフボフしてるじゃな。掘ったあどでも。うん。」

▼H氏の父は□□県でサラリーマンをしていたが、母が病気で入退院を繰り返したことや、祖母を□□県に置いたままで青森と□□県を往来することが難しいため、思い切って仕事をやめ、祖母とともにこちらへ移住することにした。サラリーマンから農業への転身は大変だった。冬は東京や名古屋へ季節労働に出かけた。――「そうそう、オエのチヂオヤが○○○（仕事の名称）やめだ理由もいろいろあったんだけども、もたいねけどの。母親が向ごうでさ、何回も倒れでさ。入退院で。それで今度こっちがらむったどあの、おばあちゃんが今度母親が今度□□県さ、××村にいだんだばっての。行がねばまねくて、大変でこつさ連できてまったわげさ今度。まいねってもったいねばって○○○（仕事の名称）やめで。」「大変であたな。」

柴田集落をのぞむ

▼H氏が小学生のころ、父親は上北鉱山でトロッコの運転士をしていたこともあった。お盆の時期に鉱山へ連れて行ってもらったときのことを今もはっきりと覚えている。そこで見た光景は忘れられない印象的なものだった。細長く並んだ社宅を出ると、真っ白な雲があった。ちょうど頭だけが出るような高さで目の前一面に雲がひろがり、見渡すとあたかも別世界に来たような不思議な感覚に襲われた。青森から長時間、混雑したバスに揺られて来たために鬱屈していた気持ちが、いっぺんに晴れるような気がした。思わずため息が漏れた。トロッコに乗って進んだ真っ暗な坑道での体験が、明るく広々とした景色の印象を一層強いものにしていた。――「ウツ（家）の父親はトロッコの。運転でねがな。操縦のほうでねがな。でオラダヅばも夏のお盆に来たときに連れでいって上北さ行ってきたごどあるもの。その現場見せでさ。トロッコさも乗せでもらってさ。ふふふ。そうやって生計たでであったんだでばの。今はもうおじいちゃん（父）はこの世にいないけどさ。おばあちゃん（母）はまだホームにいるんだけどさ。90歳で。」「（鉱山での記憶は）あ、ある。あるの。私あれ小学校だでば弟もその頃いでさ。ホントに今でも鮮明にこう思い出すのがさ、あの…社宅がら出で、社宅がこう細長ーぐなってまっすぐ出れば、ウラさ出でも正面さ出でもさ、たがいどごで、雲が、もうこの辺。うん。ムスムスどこう雲さ。雲の上さアダマが出でさ。ハァーどもってでもきれいでさ。何かこう違う世界さ来たみたいな感じで。んーあの雲の上がらね、アダマこう出るのもまだ。そしてトロッコさ乗ってあの、な、暗い採掘しちゃぁの中もな、すごいもんで。うん。今のあのあのワイン作ってらどご龍泉洞でねくて秋田の、秋田だが、どごだっけ。ワイン。もう、トロッコさ乗れば、もう真っ暗でもねんだけど殆ど暗闇でうん。結構、でも青森がらバスさ乗ったもの、混んで混んで、混んで混んで混んでもうあの通り当時はバスのあれもよげいねがったべし、やあへんぴなどごだど思ったけど朝のそれだげは気持ちよがったな。うん。」「（鉱山町は賑やかであったかというと）そんでもねんだ。あれ、お盆で誰もいねがったんだべが。でもさ、やっぱりバスでちょっと出ねばそんな賑やがなどごねんだね。うん。バスで、あの買い物するどぎも病院行ぐどぎもバスで結構乗ったねな。山道を。（鉱山町のなかに施設設備が充実しているわけでは）ないの。たはんでかなり不便だったがもしらねえよ。今みたいにみな自家用車持ってるわげでないしな。ふふふ。」

▼H氏は、今朝畑から採って来たというミョウガを洗いながら、思い出話を語ってくれた。小学生のころ、マンガが好きだったH氏は、母親が営む店の一角を借りて、小遣い稼ぎに『貸本屋』をはじめた。冬場はソリを木造の町まで曳いて行き、定期的に新しい本を仕入れた。――「自家栽。自家消費の。うん。（今も稲作は）やってます。まずな。天気に左右されるどごで。今年はあまり、期待されねな。ヤマセばり吹いだどごで。」「いやあ写真…なあ。ねべおん……。貸本だばワ自分でマンガ好きだどごでな。なんもおっくうでねくてさ。冬はあの、アレだよ。そごの柴田のはずれっこの里見さ行ぐ通りのあすこがらずっとまっすぐ大神宮（木造萩野）まで一本道通ったもんだっきゃ。冬。あすこ一本まっすぐ歩ぐにさ。一本道通ってそごソリっこ曳いで。あの、貸本つけで。歩いてな。そいって歩いたもんだ。そしてかえ…新しいのと交換してきて、まだウチさ来て並べ替えで。うん。小学校（の頃）。私が中学校なってがらはもう店やめでまってるどごで。店は母親（が経営）。うん。ただその場所ちょっともらって借りで貸本やったのがホラ。オラだばそうやってやった。へばお小遣い貰いにほら。自分で貯金して稼いで、ね。」

（2017年8月27日取材）

(2)つがる市木造菊川

⑨ Ｉ氏 昭和7年生(86歳) 男性

来歴 ▼当地で生まれ育った。

呼称 ▼サラケ・サルケ

使用年代 ▼１２～３歳の頃まで、つまり終戦のころまでＩ氏はサルケを掘る手伝いをした。いっぽう、サルケが使われていたのは50年前（昭和40年代前半）までとも語る。Ｉ家で積極的に採取をおこない利用したのが終戦ころまでであり、Ｉ家の周辺を含めて使用されていたのがおよそ昭和40年代前半ころまでであったということだろう。――「そ、そ、そん、それは…ワダシだぢは小さいころ、小さいころても今より70年くらい前だでばな。」「そういうあがたのは、あがたのは、何年…何年なるべえ。わだしだぢがテヅダイしたのが…10ま、15～6、小学校…5、6年生が、まあまあその頃だんでな。だんで、今より70年六十七八年、70年…うん。オラっきゃちょうどま、ちょうど、オラっきゃ戦争（が）生まれだのが（始まった、の意）十…三だげ四だげ、20年だどごで、20年の戦争（が）生まれだ…前に手伝いしてるはんで。だんでま、小学校あの、５年生が６年生、こう、テヅダイに行って…。（自分は昭和）７年生まれ。」「サルケは、オレの兄…まえでがら、まえる…それでも50、50年ぐらい前まで使ったんでねがなあ。50年…うん50年、おあ、つかねぐなってがら、まるとつかねぐなってがらだあほんでも40年…40年が45～6年でねべがあ。まま50年なるがなねがだな。」「（結構遅い時代まで）んん、使ってあたんだ。使ってあたよ。うう。みなみなでねけどもな。そのうぢにカネのある人はマギなたし、そのえのカネのある人はセギユだしな。いろいろ、まあその、その間柄のその、差別はカネのある人ない人、あたはんで、いぢがいにオラだづだばなんも物知らずだはんで、なになにと、うー言われねえし、だけんども、そういう、アレは、それごそあたな。」「ま、だいたいそういうまあ今となれば、だいたい、まだ12～3歳のトシだっきゃワでも、覚えでるってむたど使われだもんだもの。」

定義・分布・質 ▼サルケはさまざまな場所から採れた。田の下から採れるサルケを「田ザラケ」、湿地から採れるサルケを「ヤチザラケ」と称した。その違いは、堅炭と軟らかい炭との差のようなものだという。前者のほうが良質だとされ、また希少価値もあった。――「その、そのうぢにぃ、（湿地だけでなく）田んぼの下がらも採れる場所もあったわげ。うん。そのサルケのその種類も違うんでしな田んぼの下がら採れるサルケは、あの…ヤヂザルケど、それがらなんだっきゃ、なのサルケってたけな。ふた種類あるんだね。うん。田んぼのながら採れるのど、ふた種類ヤヅがら採れるのど。そうそう、田んぼがら採れるのは…何のサルケって。ヤヂがら採れるのはヤヂザラケ。田、田ザラケであったぎゃ。しかま忘れでまった忘れでまったな（笑）ふた種類あったわげ。」「違いあるある。あの、つがいずのは、オラはきりわがねけどもだ。な。しみ（炭）で言えば、カダズミどヤワラズミあるべ。そういう関係。田がら上がったのはカダズミ。うん。それごそヤヅがら上がるのは今の、なんつ、ヤワラズミ、やっこい炭だでばな。あの…かだい炭はあのカダキ、カシラギとがケヤギとがそういうかだい木がら出はるし、あの、柔らかい炭は特に普通の、まあ柔ら木てへばこういうやらぎ、まあ色んな、な。やらぎとか柔らかい木。ホントの、カダズミは、のケヤキどが堅い木。」「ううん。そうそう。田んぼがら採れるサルケはいい。それはほどんとナンボも採れねんだ。採れる場所もねし。ナンボもとれねえ。だいだい…あの、場所によって。」

入手法 ▼サルケの売り買いはあったが、盛んではなかった。――「うー、（サルケの売買は）あったでばな。うん。あたよ。うんオラダヅだたらその買う、お、この付近は、まま買いに来たって、まあそれは、買った、多少のまあ、ねえふとで買った人もあし、まあ売ってやったふともあったワレワレタヅはそういうアレはちょっと…話はな。すた人もあるし、アレだけんども、ちょっとそういうのはアレだな。うん。」

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼現在、つがる市の斎場がある付近の湿地からサラケを切った。当時は道路の両脇に湿地が広がっていた。土地を買ったうえで掘ったり、地主から許可を受けて掘り上げた。――「場所今なぐなってまったね。区画整理してまったもの。そのとじは今いぢばんのあの分がるのは、あの今の火葬場あるべあのキヅグリ（木造）の。あの付近がいぢばんの、あの付近が田んぼの、あの田んぼってへばいがヤヂてへばいがわがねひぁオラだぢもちょっと、まあ分がらねってしよりも、どういう具合にこのサラケづものでぎだもんであるがづごどはワシだぢは分がらないけども、」「したんであら、今のヤギバ（斎場）あるべあの、あの付近は、あの付近てへばなんだか、あの、中野あの川（中野川）わだれば、あれ、ほどんと両ワギ、あの…ミナミヒロム（南広見）さ上がる、近ぐまで、あの、山田川、あるんだな。あの手前が、そごの川わだって山田川の間がほどんと、あのくの両ワギ道路のケンドウのあの、ま、ケンドウだケンドウの両脇が、ほどんとそういうヤヂであ、ヤヂであら、そういうのば、ま、じっとあがたんでねけども、だいたい場所場所にその採れるどごがあったわげさ。それがまあ、その…地主がムガシの地主がもて、そしてまあ、サラケまぁほしいってへばまだ、へばオエで売るとが、そごきていいって、許可受げでまあ、（サルケを）あげだ（掘り上げた）。」「借りでってそごにあるはんでひゃ地主さ許可を受げで、うん。ううん。（採掘した場所は

ヤヂなので）小作してるわげでね。地主は持ってあるなも小作づごどでねげそごのまあ全部あがったもんでねだたて場所場所にって何の関係でああいう具合になったがオラダヂわがねけども場所場所にあったわげ。」

▼採取に関わる作業の中心は男性だったが、乾燥させるときは女性も手伝った。小学生だったＩ氏も１２～３歳の頃まで手伝った。――「オドゴの人。女の人はしたんでその、あのう、かわ、あその、まその、上げだとぎででも、あのテヅダイはしたばってほどんとがオドゴド、同士ばり行ってやってるけども、あの、乾がしたりすどぎ、そえにひっくりがえしたりろテンキボシ（天日干し）すどぎはこう、みんなであ、こう、手つないでこうやるどごで。うう。まあ女もテヅダイばしたりす。」「ぁぁ、あのチヂオヤにかだてで、あの、まきっててサラケに作ってこう切って、上げでまあ、焚ぐように、やるごどは…まならたてへばいいがそれさちかわれで、やった、それは……分がるわげや。」

採取法　▼一尺二寸ほどの幅のテンズギを垂直に下ろすようにして切り込みを入れた。場所によっては、１枚分（一尺二寸の正方形）しか掘れない場所もあったが、深く掘れる場所では、幅は一尺二寸、長さ（垂直方向）はその倍、厚さは三寸ほどの直方体に切ったサラケを水の中から引き上げた。水の中ではサラケは浮かび上がるように軽かったという。水の中ではドヅギ（胴までの長さのある靴）を身につけた。そして、引き上げたサラケを半分に、つまり２枚分の正方形に分けた。２枚に分ける際には、タヂのような道具を用いたが記憶が定かではない。――「さ、最初下ろすわげや。その、あの、テンズギってよぉ。テンズギのぉ…今、あんだがだテンズギったってわがね、こういう…これクワってわがるが。こういうものの、幅の、１シャグ、うーう、３、うー、１シャグ２寸の幅、１シャグうー、１シャグ２寸ぐらいの幅だ。幅の、ハヅギ（刃のついた道具）あるわげよ。１シャグ２寸のな。そしたの、ハヅギあるわげ。１シャグ２寸のな。それで、こう、こ、こぢではで、こちさ、い（柄）、このいついでら、あったわげ。それでこう下ろして切ったわげ。うん、そして上げで、ちょうど、まあ、そんきの幅のやづで上げで、その、こづぎしょうほ、正方形のほどこんだ小さいあの、まんだ切る、ま、鎌、ま、カマってへばいいが、あんとぎなんだ、それでこう、切ってろ、シカグにこう、あげで。」「うう、う、上げるわげ。ど、ドヂガァ（胴付ぎぁ）、ドヂ（胴付ぎ）だて、今、あんだだぢわがね、ドヅギ（胴付ぎ）の、まあ今でも靴屋さ行げば売ってるけんどもたがいけどもな。なまえ（何万円）もするけど、ドヅギの靴はいで、こ、こ、このぐらい（腹のあたりまで）の水の深さまで入る、入って来てるもんだ。そのぐらいの深さのナガがら上げる。して水のなががら。上げでこう寝せで、ちょどその大きさにこう、ちょうど。う、そう、厚さは大体２ズ…２寸が３寸ぐらい、厚さは決まってで、長さだばろう、長ぐ上がって来るわげ。うう、上がって来るどお厚さは、まあ決まって上げで来るで（ば）なへばちょど長さ、２枚ぐらいの、あの厚さであ、のう大きさで上がって来るどごでそれ、それを２枚にちょうどしさ、ま、タヂあれ。」「この、（厚さは）３寸の、まあ３寸ぐれえで上ったがさもうはっきどわがねぐなったけど３寸ぐらいのさ、あの…（厚さを除く一辺の長さは）１シャグ２寸（四方）だどごで、あの、あ、ん、１シャグ２寸だどごで、うん。うん、掘り上げで、してまんだこの、１シャグ２寸の、こう２枚に採るわげ。うん。そして、あの、で切って、だんで、そのヤヅがら、２枚あが、２枚あげる、とれるどごもあし、１枚しかとれ、１シャグ２寸の、３ズンの１シャグ２寸の、マシカグののが、あの、１枚しか採れねぇ場合、ど、場所もあるし、２枚採れる場所もあるわげ。まあ、こうナガグ（つまり１尺２寸の倍の長さに）切らさったのを、これをまだ半分にまあ、したんでこれが１シャグ２寸ののを、１シャグ２寸で、あ、そのぐれだべ１シャグ２寸、が２～３ズン、ぐらいのづが、２枚あがるどごど１枚あがるどごど場所に、１枚しかあがねどごもあし。うぅ。うう、ずーっと。そしてそれ切ってあげで。１シャグ２寸が３ズンだ。１シャグではねべおん。確か１シャグぐれえでだばねべ。１シャグ２寸ぐれえ…そのぐれえだど思う。思うしたども（笑）、うん。そして、水のながヤヅのながだがら水のながでスッと浮がぶもんだんだ軽ぐでぎでる、歩いてもフワフワづ場所弾力性のある、ま、だいたいそういうまあ今となれば、だいたい、まだ１２～３歳のトシだっきゃワでも、覚えでるってむたど使われだもんだもの。」「（２枚に分けるには）ベヅの道具って、まあ、な……。ま、タヂみたいなので切てあたべな。タヂてぇ、これタヂ。こえんたもの、つかてあたべな。ああそしてしゃべればそだがもしらね。こえたづでま、スパッとこう、まっすぐだあれでな。こういうでまあまっすぐにでぎだもの、そういうづでやったがもわがね（が、はっきりとはわからない）。」

菊川の集落

▼Ｉ氏は現在も、当時のタヂを大切に手入れして使い続けている。春、土の軟らかいうちにミグルマワシ（水畦廻し）をしておけば、田のクロが乾いてくるにつれて自然に切った部分が離れた。Ｉ氏は子どものころ、親からミグルマワシの手伝いをさせられ、見よう見まねで覚えたものだと語る。――「うん、（今でも当時のタヂを）使ってらん

だオレ。にゃ、（何を当たり前のことを聞いているのかという強い調子で）今でも同じもの。うう、こう、払うんだでばな。田のクロ払ううんだ。ミズグロって、これ、ミズグロ切るんだはんですさ。うん。ミンズ、ミズグロづのは、田んぼさ水入ってが、入ってタガグィ（田掻き）やるどぎの、草こうボウボウど入ってるどぉで、クロのあえ、あの、は、ガワリが入ってるどそれ、あの、カマでやねでこれでタヂばらいしたもんだんでぁ。春はぁ、ミグルマワシってこえの腐ったタヂで、キンズ付けるだげ田んぼの、アレさ、あの…田んぼさ傷付けるミグルマワシってへば、柔らかいうぢにミグルマワシすぇば、あのぉ、乾いでくればこれがらこう離れでくるわげクロがら田のクロがら、離れるようになってるわげ。それ離しために、あのみ、た、あの、ミグルマワシってした。これ、うう。最初のあの、田、乾いで、シギかげるとぎにな。だんで大変なごどやった。ミズグロも切るし、あのミグルマワスっ、ミグル最初はメグルマワシってした。うん。メグルマワシって、ミグルマワスってへばワレワレ小さいどぎあ、親に『メグルマワシせ』ってへばちゃと分がるようにみな見るに慣れるでそれですさ、それが見るに慣れるっつうこどばであるわげや。たて見るに慣れるやる気ねばダメだだでばな。な、んだべ。なであだでもや、つ、あの、この付近のたぼのとおや、見るに慣れるって、何シゴドしても見でるうぢに慣れるこどばだだそれでも、やる気ねば慣れねでばな。うん。だんでそういう。そういうもんだ。」

▼サラケは１尺２寸四方、厚さは３寸ほどに切った。Ｉ氏はその大きさを思い出すために、曲尺を取り出し、自分が昔大工としてテマドリ（賃金労働）をしていたために３種類もの単位の曲尺を持っていると語った。「盗人と、工作的な才能のない人は、人間でない」と言われたという。――「あの、その田ザラケも、あの、あの大きさはよ、２、今で言えば、シャグ…であったべ。シャグであったべな。シャグって、１シャグ、１寸、（曲尺を示して）オメダヂだばわがるべえこれだばこのサシだばちょとわがらねえべ。これはセンチメートルだべ。…オラなもモノ知らねえどごでや。オメだぢだあわがるべ見れば。これ、これだな。これムガシのサシだわげや。これ尺単位。うん。これは今のあんだだぢ習ってる。センツメートル。う。これはクジラザシであったべおん。クジラ尺であったべおん。うん確かほんだ。」「んんまあまあ色々といま、あの、まあ、いろいろとムガシのサシ…ど今のそれまあ、いろんな、まあ。人間づのは、一人めなにんげんは悪い言葉だけども、『のしぼどど、大工けぃない人は人間でない』っていわれだわげ、小さいとき。そういうこと（ば）、のしぼどって、のそむ人。人がら盗む。『ぬすびとど、大工けねば人間でない』（盗人と大工気がないと人間でない）ってそういう、そういうこどわざもあったわげ。したんでこういうのを、使い、なもものわがねよ使える、ようでねあまいねづごどだ。そしてまあダイグさのテモドリ（テマドリ：賃金労働）もやたりしたどごで。まあこれは。これクジラ尺どメー、センツメートルど、これど。（３種類）ある。まああるだでばな。だんでほどんと今、あの…あんただづぁ使うづあオラ、シャグだづ、だばオラ、ま、どづでも使うけんどもな。これぁ、主にワスだづはこえで習ったんだ。こえで、このサスで習ったんだ。」「大きさはな、シャグ２シンだあこら、このぐらいだよ。このぐらいの大きさがしこ。１シャグ２寸。うん。正方形で。１シャグ２シンのサラケあがる。厚さはだいたいナンボであったべ、厚さ…し…、乾いでがら、し…３ズンぐらいだべな。３ズンぐらいの厚さ、へぁ、あの、乾がさえば、うう、まあちょっと小さぐなるけど。か、軽ぐなる分。１シャグ、３ズン、ぐらいだべおん。３ズンぐれでえ、あの、水のなががらあげで、してかわ、ずっと乾がすわげ。」

乾燥・運搬・保管　▼掘り上げたサラケは３～４段ほどを、風通しをよくするために間隔をあけてレンガ積みにした。これをマドヅギ（窓継ぎ）と言った。乾燥を促進させるために幾度となくひっくり返した。女性や子どもも手伝った。――「重ねで乾がすわげさ。マドヅ、ま、『マドヅギ』（窓継ぎ）ったってオメだぢわがんないけど、こういうの、たどえばこういうのある、ま、こえ、こえだどすでばな。こここれど同じものまあ品物だどすでばな、こういうごと、こういう、こう、上げで、まんだアギにこうやるの。まんだアギに。これさもこだこちさ、こちさまだ、こういう具合にろ。こういう具合、『マドヅギ』って乾がす、このこれがかんじぇ（風）通ってろ。これさこうまだ上がるわげだでばな。うん。だいだい…三段が、それでも四段が…それでもこのぐらいのたがさ（腰の少し上あたり）まであるはんでな。たって三段が四段ぐらい…。うん。これで二段、まあだいたい二段ぐらいだとまあ三段が、それがなんか、なんぼどおり（幾通り）もやるんだ。ううーん。ずっとあまりたがぐやってもアレだどごで大体三段が四段ぐれであったがどもうよ。今、今はっきり分がねぐなってまった（笑）。」「その上げだのすさ、まんだ乾がす場所にこう重ねで、そしてか、乾がしたんだ、そして何回も何、つが天気いぐなれば乾いだのこんだひっくりがえしてひっくりがえして順繰り順繰りむったどやって。（何回も）乾ぐまで。」

▼乾燥した頃を見計らって、７～８枚を１マロ（一束）にしてナワで括った。束ねる枚数には決まりがあったが、正確な枚数は忘れてしまったという。そして天気のよい日に家へ運んだ。馬を飼っている人は大八車に乗せて、そうでない人はリヤカーで運搬した。それは９月頃だった。――「何月ぐらいてとぐに、うう、早ぐ…つくてればそのそういうふうなテンキボシ（天日干し）してでも、てづ、あの、けきょぐてまめにこうひっくり返したりこれねばそれまだ乾ぎもまだ、うう、アレだしな。たんでその、ホントのなん…何回も行ってしてひっくりがえして乾がすんだはんで、まあ、そして乾いだころさなればもう、乾いできたんでもうへねやまね天気よぐなればへでおがねば、その乾

いだサルケがうつさもて来らいねづわげでこんだひまひま勘定して、やったな。あのあだり何月ころ、マ（馬）のススクサ（しくさ）刈たのは、それごそ…今、これがら、あの、イネガリ終わって、で、９月さ入ってがら、ま、シクサ刈るどかいろんなごとをやったはんで、そういうあだりだと何月…まあホントのぬぐいとぎ乾いぐとぎでにゃあまいねはんでまあ大体、うう、６月…７、まあ、今頃（９月）さなれあまんだ乾いでもてくるとぎでねがな、まあ、暇みで、うう。稲刈る前に。うう。前にもて来るてそういうジギであったべおん。」「荷車。うん。うう。マさ引っ張らせで。それがら、だ、ダイハヂグルマて、分がる。アレさももて来る、マ（馬）たでで（飼養している）人は、アレでくばた（運んだ）人もあし、その間のあリアカて、リアカでくばた人もあしま、だいだいマでだでば、マの荷車でふぱて来てる。うん。」「うう、まるって、ううまるってやる。あれ、あれは何枚であったべ。５枚…し、７枚ぐええ、７枚…10枚もだば積まさねべさそのあづみによてこのぐえぇにこう、まあ、７～８、６～７～８枚ぐらいのもんでねえな、たぃげ決まりあんだばたて、もうはっきりわがねぐなったでぁ（笑）。」「まるぐって馬の、ナワ、それごそナワわがるでばな、器械ナワってあの、な。あのナワで。藁縄の、綯った、こうマル、今のそういうマルい。あれで。ま、それごそまるって持ってきて。んだあのマル、７～８枚ぐらいだべおん。たいげ決まりあってあったんだばってな。」

▼一冬に必要な束数については忘れた。ハルキであれば約６尺の丸太を６尺の高さに積んだものを１ハリとし、一冬に４ハリほど必要だった。同様に、サルケについても何マロ（何束）が必要かということはおよそ見積もりができていたものだが、忘れてしまったという。また、サルケばかりを焚いた時代もあれば、時代が下るにつれてマキを併用するようになったこともあり、それぞれの状況によって必要なサルケの量やマキの量は変わっていったため、正確なことは思い出せないという。――「一冬に…あれ、ハルギだばよ…４ハリぐらいの、４ハリってへば、あんだだぁふとハリなんぼだが分がるが。ハルギあの、ログログ（６×６）のハルギふとハリづのは６シャグに６シャグの幅で、積んだのが、フトハリて、それがログログのマギ。して、ゴログ（５×６）ってへば、あの、ヨゴ５シャグに高さ、あの…６尺とが、うん。そういうゴログどログログどマギで。うん。それで、アレでまあ４つ、ふと冬に、４ハリぐれえが、普通のアレであったべ。し、ナンボ何枚、ぐれであったべな…あれも、たいげ計算通りにあんだけども、何枚ぐれだったがわもそれだばちょと…」「ううそういうアレではねえであっただいたい、あの、その、アレごどナンボマロってしてあったが…アレであったがわも（笑）…そ、こきがえればちょと分がね（笑）アレでもナンボだらナンボぐらいあれば一冬焚ぐとがしさ。それさまだその、サルケばり焚いだとぎから、段々にマキさ、マキど一緒に焚いだとぎど、マギと一緒に焚いだとぎは、ナンボ、あのそのサルケばり焚いだとぎはナンボってあてあたんだけども、うう、それもあるづや。したんでその、サルケばり焚いだとぎは、まあオラだぢさなれば、な、んぼがぁ木のほが合わせで、な、その上さ、木の上さこうサルケ、被せで焚いだもんだどごで、まあ、サルケばり焚いだとぎナンボぐれえ焚いだ…もんだがオラも、その辺まではちょと、だんだん木焚ぐいになってがらすぐねぐなったわげさ。そして段々にこだ、うう、今のマギのほさまだマギがら交替になって、セキタンなて、セギユになて。うん、きたわげ。」

用途　▼暖房のほか、炊事もシボドでおこない、燃料にはサラケやサシ（藁束）を用いた。飯炊きの燃料としては田ザラケが適していた。サラケを用いられるのは「よいほう」で、サシでも炊いた。サラケよりはワラで炊くことが多かった。シボドからマキストーブへと移行したのがいつであったか思い出せない。マキストーブでサルケを焚いた時期もあったがそれほど長くはなかった。――「う、多少はあたけどぁそのとぎは、田ザラケ、うん、（今はっきりと思い出したが、サラケの二種類というのは）田ザラケだ。田ザラケどヤヅザラケだんだ。うー、ナンボがあったべけどほどんと、うーなが、ストフのナガさだばそれ、あまりた、うーた、焚ぐ…うーそいなにサラケ焚がねぐなて、シボドつかねぐなて、マギつかうよにな、使うよになってがらだば、どまだ多少はつかた人もあるべげども、ほどんとまあ、ねーよ、まあねえよなもんだな。あどマギだあマギて。う。」「（シボドを閉じたのは）なーん歳、オラ分家になって、分家になってる人だんで、オラきゃ分家になったどぎも、あ、それでもシボドつけであったべな。わ何年に（笑）なったがら、キオグねぐなってまったでぁ（笑）。うう。」「うう、みな飯炊きだって（使った）。サラケだきゃいいほだよ。ワラでたワラ。ワラで。今でもおんなじだど思う稲かたこのワラで。ママ炊いだどカネのね人は。からでもその、サシてサシとった、ホントのワラで、サシくべで、ママ炊いで。あの、稲束ねだ。束ねだ、それごそイドでなぐぅ、ワラで束ねる、その、ワ、稲で束ねるそれごどサシってした。サシ。ままう。それかだまてあ、ろ、にぎてちょうどこのぐれのこぐれこだどごで。それ炊いで。」「うう、ちょんど、たばねが、きのがちょんどこのぐらいのが一把ってへばこのぐらいで。」「（炊事には）田ザラケのほがいいでばな。したんで田ザラケは、堅炭のかだになるわげ。それほとんとナンボも、ナンボもあがる場所ねえ。」「うん（サラケだけで）炊げる。田ザラケだげでも炊げる炊げる。うん火力もいいし、カリョグがいいし、とにかにや、ママ炊ぐどぎには、ほどんと、ワラとが、そういう柴とが、そういうアレで炊いでぎあがったものをこだ、まあ、その、サラケまどめで、まどめでってへばいいがど盛りにしてあだったもの。」「んーそれで炊いでママ炊いで。ぬるぬる炊いでれあマンマたがえねえどごで、バンババンバ、まあ、な。炊いで。たてワァ（会合に）いがねあまねじゃ。ワシャでねへてもなぼでも覚えでら人あら

ね歩げば。」

操作　▼炊事に適していたのは田ザラケで、サラケを山盛りにして火力をアップさせた。

副産物　▼Ｉ氏の長姉が北海道へ嫁いだが、嫁ぎ先の夫が家を訪ねて来たとき、「サルケカマリ（ニオイ）がするなあ」と言った。「ニオイなんかしないでしょう」と反論したが、実際に自分がサルケを焚かなくなってから、焚いている家を訪ねたときにニオイを感じたことで、姉の夫が言ったことが本当なのだと分かった。――「煙はやっぱりよ、焚がない人ど焚ぐ人でねあ分がんない。うん。分がらねづごどは何故そういうごとワ言うってへば、オエのイヂバンの姉が北海道さ嫁なったわげ。して北海道のダンナがえさ来れば、『サルケかまりすなあ！』ってこうしたどごで『何のカマリするもんだば』てこしてあたけんども、ずっさいに自分で焚がなぐなって焚いだウツさ行げばやっぱりカマリすんだなっづごどはやっぱりか、か、その、その、アレでかいしゃに。うん。うーんそうそう。やっぱり実際に、ああ、しもんだなづごど、やっぱりはじめでろう、オエの北海道のとさしゃべたぁず、キモヂもな。うん、ニオイす。」

▼ランプを使用していたころ、他家を訪ねると、炉を前にして横座に座っている主人の顔が見えないくらいに煙が充満していた。当時のことを思えばよくもそのような状況のなかで暮らしていたものだと、不思議に思う。目も痛かった。――「（目の痛みも）うんそれああったよ。だって、だいたいそのウツさはいたどぎよ、ムガシのランプわがる。ランプ、ま電気一冬になん、ふと冬になん、なんぼばりついで、まるっとついでるが、まほどんと電気、ほどんとこの付近だげ風つえば電気まだ消えだもんだどごで。とぐに、シボドのヨゴジャの、ヨゴザの前しゃすわるどダンナの顔見えねえだものエさはいても。それだげモグモグってしたどごにいだんだ。うん。今考えでみればまあ、自分だぢそれにいででも（自分たちも昔はそのような状況に実際いたわけだけれども）、不思議だ。ど思う。」「（横座に煙が）行ぐずわげでねけども、そごに焚いでればヨゴジャそぢさこぢがら入口がらこう入っていげば、ダンナがふそういう、そういうアレだよ。」

その他　▼Ｉ氏によれば、田んぼを作る人は乞食の次だと言われたという。Ｉ氏自身も稲作だけでは生計が成り立たず、季節労働に出かけていた。――「そう、そ、まず、記憶ってへば忘れでそれごそなも分がらねえ、うう、たぼ作ったぁさムガシのこどわざはよ、田んぼツグル人はな、教えればアレだけど（笑）、田んぼツグル人は、ムガシのこどわざでいえば、ホイドの次だって言われだわげ、そういう貧乏だ人でねぇば田つぐんねぇわげ。それしかやれねえ人間、オラみたいなバガだ人間でねば田んぼつぐねひてあたわげ。そういう、ま、こどわざがあるわ今もってもほんだべ田んぼつくってるふとこの付近でいえばもうわんつかになれば誰も田んぼつぐる人よりねぐな、ねぐなるって田んぼつくってママかれねんだもの。だてワシだぢちょうどはだらぐどぎは、田んぼぉつぐって田んぼぉ終わって終わるってへばいいが田んぼその合間に、あの…デガセギって、あって、デガセギさ歩いたはんでどうにがこうにがまあワダシダヂはわってきたこれがらの人はこんだたぼ悪（わる）ふたってデガセギもねしまんだはだらぐどごもねえどごでそれで困るわげでしょ。そういう、時代だ。」「ま、だいだい…まあ、失礼な言葉だけども、オラより、こごの、このムラでだよ。このムラでだぁ。ムラでオラより分がる人はまぁまおそらぐ、まあ、あまい…いるがもしらねけども、いないど思うよ（笑）。あの、いがねひてもいば、明日の朝まででも話すえばなも用事ねんだはんでいんだけども。」（2017年9月3日取材）

⑩ J氏 昭和3年生(90歳）女性

来歴　▼昭和３年に福原で生まれ、19歳のときに菊川へ嫁いだ。――「ばっちゃ嫁だどごで（笑）。（嫁にきたのは）３年だって昭和３年。まで、父さんいだがさ見でくる。…いや出はってまってだもいねじゃ。ばっちゃクジュウもなるどごでなもかも（笑）。（昭和）３年（生まれ）だの。今クジュウ過ぎでるどごで（笑）。オメだぢの顔しかどわがらね。病院さ行ぐづぎだあ眼鏡かげでのぉ。むたど血圧のクスリ、ねぐなれば貰いに行って飲んでらばって。（私は）フクワラで生まれだの。わきゃ嫁だ。（嫁にきたのは）ジュウク歳がら…今クジュウがらよになるもの（笑）。」

呼称　▼サラケ

使用年代　▼Ｊ氏が菊川に嫁いだ昭和22年頃は、サラケを焚いていた。――「今だばサラケ焚いでねっきゃ。オラ来た近所だばサラケ焚いであったばって。」

入手法　▼自分で採取した。

採取の目的　▼言及なし

採取の時期・場所・主体　▼サラケは田から採取するので、田起こしよりも前に掘った。――「うん田んぼやる前にさ、掘ってやただ。」「んだ。（今とは生活が）ちがるの。ムガシだばさ、田んぼがらサラケ採ってきて、ただ炉ばりさやって木焚いですつぁ、今だばストブばりやってらどごで、なもアレだっきゃ。こさはねべが（笑）。なもなも、ワご飯たべでまったはんで。オトサいだでねべがあに…車いだきゃの。わ、呼ばってみるおん。おとさいだな？出はってだもいねじゃ。カガの車で行ったべにの。（よくサラケのことを知っているのは）サラケばり焚いだもの。むがし。したばって今シミでばりやってらどごで」

採取法　▼サラケは田から採取した。長い棒のついた道具で半尺ほどの大きさに切った。――「サラケが、山さ行げばさ、採ったり、田掘ったりせばソゴがら採って。切るものあるの。なげえ棒まんたやづでさ。やったぁげ今、そさ掛がってらべが。サラケきたアレあるんでねが。あら、ナンモねな。なげえ棒もってら、行ったばってなもこごにいらでばの。サラケ オラだきゃフクワラがら来たどごで、田がらサラケ掘って、で今そしたやづやってねえシトプばりだきゃ。したどごでマギ…でばりやってらどごで。」「（切ったあとは）そのあどこんだ乾がしてつぁ、シトブやって、シつけだり、今だぁ、アブラでばりやってらっきゃ。したどごでなもやってねえの。（大きさは）このぐらいだべの。まず、このぐらい（半尺くらい）だの。少し長めにしてさ、うん。でストフさやってだばって今、油でばりやってらどごで。わあ来た近所だばの。サラケ採って、田がら採ってやったばって（笑）。」

乾燥・運搬・保管　▼サラケを切ってから乾燥させた。――「（切ったあとは）そのあどこんだ乾がしてつぁ」

用途　▼Ｊ氏によると、昔は囲炉でサラケを使い、炊飯もおこなった。その後、炭やワッチャギ（割り木）を利用するようになり、アブラ（灯油）を使うようになったので、サラケは使わなくなったという。――「はねがこっちゃ。○○（息子さんの名前）いだ？だもいねえじゃ。ばちゃ今クジュウもなるどごでなも（笑）。なも分がらねえのお。サラケ？今だば炭ばり焚いでるどごで。ばちゃクジュウもなるたきゃなも分がらねじゃ（笑）。うんどんだべのお。サラケだが何だが買って来てくべだばって今だばストフばりだっきゃ。サラケだば田さ行げばあるんでねえべが。すさヤマゴだのの。今だばシミばり焚いでるどごで、なもそしたやづ焚いでねの。ストブばりやってるどごで。うーんんだんだ、ムガシだば炉あてさ、くべだばて今ストーブばりだきゃ。したどごでアブラばりやってるどごで、なもすたやづやってねえの。もどだばさ、山がらハ…な、なしてらばって今だば炭ばり焚いでるっきゃあ。したどごでナンモすたづ使ってねの。うん、山さ行げばさ、こう、の、はってきてやったばって今だば炭ばり焚いでるどごで。」「ムガシだばサラケの、山さ行げば採って来てらばって今炭ばり焚いでるっきゃ。そさバンゲさなれば今度、木割ったやづくべでストブばりやってるばって、今だばそうさびぐねっきゃの。したどごで、なも、こちゃはねが。なもストブもやってねだ今だば。ムガシだばの。そした（サラケを採って来た）ばって今だばシミばり焚いでるっきゃ。だどごでストブも何もやってねの。フグワラ（福原）がら来たの。今だばどうでいがねっきゃ今クジュウがらよなるもの（笑）。うん山さ行げばさ、山で採って来たばって今だば炭ばり焚いでらどごで、ストブもなも使ってねの。ムガシの。ムガシだばサラケでご飯炊いだばして今、ストブばりやってらどごで、なもアレだじゃ。炉あったの。そしてこんだ木くべだりして、今だばストブばりやってるっきゃ。したどごでナンモ、（今は燃料は）アブラだべにの。アレの。はねが（笑）。こしたストブやってさ、それさナベコやって、へばシコつぐどごさ置げば、それだばやてるず。湯だばむたど沸がしてるばての。うん、（サラケで炊飯したのは）ムガシだばの。今だばなも全然サラケやってねもの。ストブばりやってらどごで。炭が、それでもワッチャギ（割り木）だめにやったりしてらばって、今だばなもすたやづやってねぇだ。うん。今クジュウ過ぎでるどごで、ワ、フグワラがら来たの。うん。（出身地の福原でも）サラケ使ってるの。今だばだも（今は誰も）サラケ使ってね。ストブばりやって…今ストブもやってねえど、炭ばりでやてるはんで。」

副産物　▼「煙が出ていたなあ。でも今は石油ストーブなので煙は外に出て行くよ」とＪ氏は語る。――「（煙は）うん、煙ではるおん。たって今だば炉やってねんで、ストブばりやってるどごで、アブラでばりやってるどごでなも、うん。アレだど。こさはねが。んだ。３年ぐらいだの。今だばストブばりやてらどごで、アブラでばりやってるっきゃ。うん。」「煙ではってだぁ、なもストフもなもやってねんで今だば、アブラでばりやってらどごで。」「シトフやればなんも煙もなもではねでおもででぁばり（笑）」（2017年9月3日取材）

⑪ Ｋ氏 昭和35年生(58歳）男性

来歴　▼当地で生まれ育った

呼称　▼サルケ

使用年代　▼Ｋ氏は、サルケを見たことがない。しかし、お年寄りからサルケの話を聞かされることがよくある。1940年代（昭和15～25年）生まれの年齢であれば、記憶しているのではないかという。――「ムガシのこどでよ、わがねな。まあ70過ぎのふとでねば。（自身は）サルケだば見ねえ。見だごどもねねオラだあ、ま見でも分がねひてぁったでばのちせぇんで。」「（このあたりのお年寄りは）したって、その年齢だばみな覚えでるらしいよな。なだかだオラばつかめればサルケの話したりすもの。（自分は世代が）全然違る。40年（1940年代）クラスの人だばおべでるがら、まあまあ、△△さん（人名）あだりおべでるべが…いぢばんおべでるてば、何でもおべでるってば××さん（人名）。だな。うん。何でも詳しぐモノおべでらね。」

定義・分布・質　▼Ｋ氏は、木造地方では吉見が最も「ちぇした」（サルケ度が非常に強い）土地であったと考えている。吉見の田は「サルケ田」であると言われていた。この菊川という地域は吉見に比べればまだサルケは少ないのだという。――「うん。こごより…吉見がイヂバンちぇしてあったんだでばの。うん。次のムラ。うう、あこの田ん

ぼがサルケだって。ほえでサルケばとたもんだてな。こごでねぐこづのオグのほうだわげさ。こつまでだあちょっといいわげさ。向ごうのほうがサルケだどごで、みなキグガワでぁったでばのこづな。地名がな。だでキグガワってす地名はずとあづまであるわげや。ムラ今はこごだばて、ホントのキグガワはこごだばて、地名としてはずっと向ごうまであるわげ。柴田のほうまで、チカノのほうまで、キグガワだわげ住所。」(2017年9月3日取材)

(3)つがる市木造丸山

⑫ L氏 昭和13年生(80歳) 男性
⑬ M氏 昭和16年生(77歳) 女性

来歴 ▼L氏は昭和13年生まれ。当地で生まれ育った。M氏は昭和16年生まれ。昭和38年ころに出精(木造)から当地へ嫁いだ。両名は夫婦である。

呼称 ▼サラケと称した。

入手法 ▼L氏は、自身の身内の話ではないが、丸山へサラケを切らせてもらいに来た人がいたことを覚えている。また、M氏は出精村の出身だが、出精には切る場所がないので、M氏の父親が、出来島にいる妹を頼って、出来島の原野へ切りに行った。原野といってもそれぞれ場所の権利があるので勝手に切ることはできなかった。丸山溜池でも、池の底の土地はそれぞれの家ごとに切る場所についての権利があった。そこでみな親戚を頼ったのである。売買の話は聞いたことがないという。――主人(L氏)「(サルケを切りに来た人は)あったあったあったあった。親戚のふとだばや、わぃじゃと切(き)に来たふともあった。」夫人(M氏)「オアダヂうんとアレだもの、デギシマ(出来島)、オラダヂじっとうぁら、シュッセ(出精)、あの、下んどり(下通り)の人だどごで、そったにあぢ切るどごねっきゃ。たんで、デギシマさ切たもんだ。野原さ。デギシマの野原さ。」主人「(夫人は)シュッセイ(の出身)だはんでろ。」夫人「(切りに)来て、切りに来たんだでばの。チヂオヤだのしさ。それぞれみな区域あるはんでさ。たんで、親戚あるどごで。」主人「毎年切てるどごで、ちゃんと、アレ、なって分がてるだんだ。切たあど分がるきゃ。」夫人「オエのチヂオヤの妹ほら、デギシマにいであったんだ。」夫人「そういう(切る場所の権利があるという)ことだでばの。たんだ、たんだやればまだそれもまだまねべおん。な。ムガシだきゃとぐにな。」主人「なんでそれば調べにありてらの」夫人「(丸山に切りに来る人たちはどこから来るのかといえば)オラダヂだば、わだばデギシマがら来て……」主人「その親戚のふとがろう、あぢにいだ場合は、オアダヂうっと切たどごろさろう、うん、ほんだわげさ。ただ個人的にだあ来て採らいねだどごで、うん、そういうごとさ。」主人「(親戚が掘らせて欲しいと頼って来たことは)いゞいゞいゞ、いゞ、そうそうそう、そう。」夫人「オメだでだもねべあ。」主人「なに。」夫人「誰がぁオヤグマギのふと切るに来たな、ど。」主人「ううん、なもねえ。」夫人「ん、ねだね。」夫人「それ(売りに行ったという話)だばわがねな。」主人「みな個人個人にろう。切たやづ、こうやてさ。乾がして。してこだ乾いだ頃なれば、これまだとくらがしてまんだこうでやてさ。切たそごの現場にいでな。」夫人「そ、それはぁ、あるばて、売ったりってす人だばわがね、聞いだごとね、ワアダヂだばじぶだぢでホラ、焚ぐだげ。切て。」主人「ねえなそれだばな、売るべあねべおん。おそらぐ。」主人「したはんですさ、(丸山溜池のなかでも掘る場所は)ちゃんと決まっちゅうだど。自分の、自分で採るどご決まってるんだ。今は(溜池のサラケは)使ってねはんでの。」

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼溜池(丸山溜池)の水がなくなる今の時期(9月はじめころ)、つまり田の用水として使われることで水位が下がり池の底が露出し、十分に乾いたころを見計らって、溜池の中に行って掘った。雨が降るとふたたび池に水が溜まるので、晴天続きの日を選んでおこなった。――主人(L氏)「ターメゲ、溜池あるべ。そごに。その溜池の水さ、ねぐなるわげ。そせばすさ、溜池のながさ、行って、あの、草、草の根っこば焚ぐだでばの。そさ乾がしてしさ、そして、使ったもんだ。」「(掘る時期は)結局、今ごろってへば…今ごろだな。掘るってへばな。採るってへばな。うう。田…に水ねぐなってまってがらタメイゲも水ねぐして、それで、作るだはでほら。」「(溜池の水は)抜いでまっ…ま、はえどご、みな田んぼさこの水を使ったんだはんですさな。今だけにな、ねえどごで。だどごで、全部ほら。水、乾がひてまるわげ。溜池な。それがらほら。切って。それをこう乾がして、しょってきて…ふふふふ(笑)、それを、ムガシな。焚いだんずな。」「(今はこの時期でも水をたたえているが、昔は)この時期になれば(使ってしまって)何もねぐなって。」「ちょうどホ

丸山溜池